

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和2年度

京都外国語大学

## はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 3 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	小野 和信		
学位の種類	博士（言語文化学）		
学位記番号	甲第25号		
学位授与の日付	令和3年3月15日		
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当		
学位論文題目	ブラジル在住の日系ブラジル人と日本語母語話者における依頼行動の対照研究		
論文審査委員	主査	教授	由井 紀久子
	副査	教授	モイゼス カルヴァーリョ
	副査	教授	山岡 政紀（創価大学）

## 論文内容の要旨

本博士論文はブラジル人を対象とした日本語教育に貢献できることを長期目標に、日本在住の日系ブラジル人が日本語母語話者に依頼を遂行する際に用いる言語行動を比較し、両者の言語行動上の特徴を明らかにしたものである。

第1章の研究の背景に続き、第2章では先行研究を6つのカテゴリーに分けて検討している。①日系ブラジル人が話す日本語を対象とした先行研究、②依頼行動に関する先行研究、③言語行動の分析単位、④日本語の依頼行動に関する先行研究、⑤ポルトガル語の依頼行動に関する研究、⑥「依頼」と「命令」に関する日本語とポルトガル語の対照研究の6カテゴリーである。①については、ブラジル人による日本語の敬語表現がいくつかの点で母語話者による表現と異なっていること、接触場面研究においてもいくつかの問題が生じたことを検証していることなどから、日系ブラジル人と日本人が依頼行動を遂行する際に相違点があると仮定できるとしている。②は語用論の理論面を扱っており、Leech(1983)のポライトネスの原理、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論、Searle(1969)の発話行為論から、「依頼行動」とは、話し手が恩恵を受けるため、聞き手の負担になる未来の行為を求めながら、聞き手の負担を配慮した上で実行される言語行動であると定義づけた。さらに、蒲谷・川口・坂本(1983)による分析法を扱い、話し手と聞き手の距離を示す「相手レベル」、用件の内容について聞き手の負担の重さで分類している「用件レベル」の数値を加算し、得られた数値を「コード値」とし、依頼行動の分析枠組みとするとした。③言語行動の分析単位として、1つの発話の中にいくつかの発話機能が存在する可能性があるため、発話機能の

最小単位として move を採用する。④先行研究より、日本語においては依頼を効果的かつ円滑に進めるために「修復行動」も使用されること、直接的・間接的に依頼が遂行されることを確認し、さらに丁寧さの表し方を整理している。⑤ポルトガル語においては、中核行動の丁寧度は、「選択した文の形式」「遂行動詞の有無」「動詞の法と時制による形式」によって変わることを確認している。⑥ビジネス上起こりうる「命令」と「依頼」の対照研究から、命令の場面では、日本人は不明瞭さを避けて直接的な言語行動を行ったのに対し、ブラジル人は多くの修復行動を用いながら間接的な言語行動を使用することを紹介し、さらにその問題点として、「中核行動」における分類の不備と依頼内容の当然性に関する考察の欠如を指摘している。

第3章では、問題提起と本博士論文研究の位置づけを行っている。研究課題として、以下の3課題を挙げている。

研究課題① 依頼行動を包括的に扱うためにはどのような分析の枠組みが適切なのか。

研究課題② 依頼行動に関する談話構造のレベルにおいて日本語母語話者による日本語と日系ブラジル人による日本語（コロニア語）とポルトガル語の対照研究からどのような特徴を抜き出せるか。

研究課題③ 依頼行動に関する表現形式の丁寧度のレベルにおいて日本語母語話者による日本語と日系ブラジル人による日本語（コロニア語）の対照研究からどのような特徴を抜き出せるか。

これらの研究課題を解明するために、日本語母語話者と日系ブラジル人が依頼する際に用いる言語行動に、どのような相違があるか記述式のアンケート調査を行った。調査のインフォーマントは関西とサンパウロ州に在住している40～60代の男女を対象としている。

第4章は研究課題①に対応して分析の枠組みの設定を内容としている。熊取谷(1995)においては、日本語で使用される中核行動を「直接依頼」と「間接依頼」に分類し、それぞれに該当する move があるとしている。しかし、それ以外もあると指摘し、本研究では「隣接依頼」と名付けている。これは、「直接依頼」「間接依頼」と「隣接依頼」とでは構成要素が異なるからである。命令、宣言等「押し付けの強い」「明示的」言語行動と許可求めのように「押し付けの弱い」「非明示的」言語行動を包括的に扱うことによってポルトガル語を含む分析が可能になると主張する。さらに、アンケート調査における場面設定に際し、先行研究の蒲谷・川口・坂本(1993)の「用件レベル」について、当然性が場面によって安易に設定できないことから再設定して用いることを提案している。

第5章では研究課題②を解明すべく、3章で設定した move の枠組みを用い、move 数の平均値における分析と move の出現頻度における分析を行っている。はじめに、各場面で日本語母語話者による日本語（JJ）、日系ブラジル人による日本語（BJJ）、日系ブラジル人によるポルトガル語（JBP）の依頼行動はコード値と move 数の平均値に相関性があるかどうかを考察した。その結果、JJは場面のコード値に応じて使用する move 数を調整している一方、JBP はコード値だけではなく、聞き手との距離も考慮して move 数を調整していることが分

かった。JJ・JBJ・JBP 間の有意差を t 検定で検証したところ、JBJ と JBP の間に有意差がなかったことから、JBJ が母語（ポルトガル語）の影響を受けているという結論に達した。次に、場面によって move に有意な差があるか否かを検証するために G2 検定を行ったところ、コード値が低かった場面では、JJ と JBP は〈命令〉を高い比率で使用しているが、コード値が高かった場面では、JBJ は高い頻度で〈希求+和らげ〉を使用し、JBP は〈宣言〉を使用した。JBJ はコード値が異なっているにもかかわらず、全体的に主に使用した「中核行動」の move は〈依頼〉であったため、全場面で〈依頼〉が用いられることが JBJ の独自の特徴であると結論付けた。頻度の高い使用は〈詫び〉、次に〈説明〉である。JJ と JBJ の〈詫び〉使用は類似していることから、JBJ は母語と目標言語の違いをわきまえていると考えられる。〈説明〉については、JJ・JBJ・JBP は比率が共通していることが分かった。一方で、JBJ が JJ より多用している〈懇願〉において、JBJ と JBP の間にも有意差が確認された。母語の影響を受けて〈懇願〉を使用した JBJ は少数であった。〈呼びかけ〉は JJ の使用頻度が低かったが、JBJ と JBP の間には有意差がなかったため、JBJ は母語の干渉を受けていると考えられる。

第 6 章では、研究課題③の解明を行った。JJ・JBJ・JBP が「中核行動」で使用している表現形式の丁寧度について分析し、共通点と相違点を抜き出している。まず、JJ と JBJ の敬語使用については、JJ が初対面の聞き手あるいは年上や上司が聞き手の時に敬語を使用しているが、JBJ は違う基準で敬語を使用している。聞き手が親しい年下あるいは同年代の場面で敬語の使用率が高くなる。敬語体系のないポルトガル語では動詞の時制や法を変えることで丁寧さを表すが、JBJ はこれらの聞き手に命令法を伴う表現形式を多用している。これは「相手レベル」だけでなく、「用件レベル」も考慮していると考えられる。次に move の表現形式の丁寧度であるが、JBJ は多くの場面で丁寧度の低い〈依頼〉の「～してください」を最も多く使用している。JBP は、用件レベルと相手レベルが低い場面以外では〈依頼〉の Poderia…? を一番多く使用していたことから、ポルトガル語では move の表現形式の使用方法が単調であることが明らかになった。JBJ と JBP が使用している表現形式を分析し、1 つの表現形式がすべての場面で使用されているという共通点が見いだせた。母語の影響があると考えられる。

第 7 章は総合的分析である。JBJ による言語行動の主な特徴として 3 点挙げている。

- ① JBJ が母語の影響で各場面の「用件レベル」と「相手レベル」を同じ割合で考慮しておらず、「相手レベル」に重点を置いている。
- ② JBJ が使用している「修復行動」の中で〈詫び〉の使用は JJ と類似し、母語と目標言語の間で正確に使い分けていたが、〈懇願〉や〈呼びかけ〉の使用においては母語の干渉があった。
- ③ JBJ の丁寧さの表し方は、聞き手が親しい間柄の場面でも敬語の使用が多く見られ、目標言語では聞き手との距離の調整のしかたは拙かった。また、「中核行動」として〈依頼〉の「～してください」をすべての場面で使用していることにより、相手レベルに対する丁

寧度の最大から最小までの差が少なく、丁寧さの表し方は単純化されていることが分かった。

第8章は最終章で、まとめと今後の課題について述べている。JJ・JBJ・JBPの相違点と共通点を論じることにより、日本語学習の阻害要因だけではなく、促進要因も見出すことができた。依頼行動を遂行する際、JBJは母語の干渉を受けて〈懇願〉や〈呼びかけ〉のような「修復行動」をJJより高い頻度で用いたことや、母語では日本語のように敬語体系が発達していないので、「中核行動」の丁寧さを表す表現形式やmoveの使用が単純化したことが日本語学習の阻害要因となっている恐れがある。一方、〈説明〉と〈詫び〉の使用は促進要因として挙げられる。今後の課題として、JBJが相手レベル【0】あるいはコード値が高い場面で母語の干渉を受けたり、それ以外の場面ではJJに倣ったりしていたが、なぜ場面によって影響される対象が異なるのかについて明らかにすることを挙げている。

## 口述試問及び審査結果

口述試問は、オンラインで行った。画面共有機能を使い、一部のデータは提示したが、パワーポイント等の視覚で確認できるような全体を説明する資料がなく、聴衆の理解を助けるより一層の配慮が求められた。

本論文の主張点の一つである隣接依頼について、必要性に対するより深い説明が求められたが、それに対して論者自身の対照研究に資する理論構築について詳細に述べた。

母語の影響あるいは母語の干渉と考察している点についても質問が集中した。二つの概念は同じとの認識であるとのことである。母語の干渉だと断定できるかについては、他の要因も考えられるので、断定表現は強すぎるという説明があった。また、相関と因果の区別についても意見を求められたが、区別をしたうえで慎重に捉えるべきだという見解が示された。

本研究の長期目標が日本語教育への貢献であるので、結果はどのような学び方につながるか、どのように使えるかについても問われた。本研究だけではまだ不十分で、今後の課題と併せ、より精緻に目標に向かって研究を進めていく旨、対応のしかたが述べられた。

Moveの名付けについて、形式からか意味機能からかについて、対立的に議論を行った。文脈によって、例えば母親が子どもに「早く宿題をして」や上司が部下に「コピーをとってくれませんか」のように〈依頼〉のようであっても〈命令〉の場合や緊急事態におけるHelp!のように〈依頼〉の意味の場合もあるが、どのように名付けるのかという質問に対し、本研究では対照研究をするため、形式から規定している旨の説明がなされた。また、ある先行研究で「直接依頼」と「間接依頼」の区別をしていないことが「不備」であるとしているが、それは慣習化された依頼表現をすべて直接依頼と見なし、表現に依存しない文脈のみによる依頼を間接依頼と考えたものであり、基準の違いであって「不備」ではないとの指摘が副査からあった。これについて先行研究と自身の考えとの違いを明確にしたうえで、論

文中の表現については修正すべきと考えるに至った。

Move の数え方について、従属節、副詞句、副詞等があるが、どこまでどのように数えるのかについても説明を求められ、「ちょっと～」など慣習化表現は「やわらげ」であり move 外ではないかとの質問を受けた。それに対し、これらもカウントし、対照研究の対象とする旨の説明があった。

本博士学位請求論文は論者のバイリンガルである言語特性を生かしたデータに基づく力作であり、今後のさらなる研究と併せるとブラジル人に対する日本語教育にも資する研究であると評価できる。先行研究の理論の批判的再構築も説得力があり、それに基づきデータ分析が十分に行えている。課題設定に対し、データ収集、データ分析も適切であった。一方で、誤字・脱字が相当数残っているので、修正期間に全て直す必要があると認められる。誤字・脱字については、審査員から受け取ったリストと口述試問中の質疑応答を参考に修正することとする。審査の結果、期間内に修正を完全に行うという条件で、学位授与が認められた。

学内審査員からは、これまでの中間段階での発表からかなり成長したという評価をもらった。成長によって学術活動に必要な基本的能力が身に付いてきたと認められる。

参考文献については、巻末リストに載っていない重要文献もあるので、提出後に読み進めているものも含め、さらなる読み込みが必要である。また、英語文献の原典からの引用のほうが適切と考えられる箇所もあった。

口述試問では自身の考えを詳細に説明できていたが、それに対応する論文の記述がやや薄いと認められる部分も一部ではあるがあった。今後さらに記述のしかたに磨きをかけることが期待される。全般的に論文としてまとまりもよく、オリジナリティもあり、主張点も明確であった。

以上、審査の結果、本学博士（言語文化学）の学位を授与するに値するものと認める。